男友だち

ローザ・ガイ　加地永都子訳

著者について

ローザ・ガイ

トリニダード生まれの女性作家。ニューヨークのハーレムに育ち、ドキュメント『ハーレムの子どもたち』などで、その活動を知られる。少女同士の恋愛を描いた前作『女友だち』をはじめ、黒人の若者たちの生きかたを見つめた作品で、全米のヤングピープルたちに熱い共感をもってむかえられている。

訳者について

加地永都子（かぢ・えつこ）

一九四〇年東京生まれ。東京女子大学文理学部卒業。アジア太平洋資料センター理事、季刊『世界から』編集者。

訳書―ミレット『性の政治学』（共訳、自由国民社）、『アンジェラ・デービス自伝』（現代評論社）、ニューフィールド&ダブル『ニューヨークが死ぬ時』（筑摩書房）、ガイ『女友だち』（晶文社）ほか。

ダウンタウン・ブックス
男友だち（おとこともだち）

一九八一年三月三一日発行

著者　ローザ・ガイ
訳者　加地永都子
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六―六二七九九
壮光舎印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

男友だち

ローザ・ガイ　加地永都子訳

ダウンタウン・ブックス

文社　定価1200円　0397-1910-3091

Have a nice story

本を読むたのしみは、いい友人と話すたのしみに似ている。熱い珈琲をまえに、ふと手にした一冊の本をひらく。すると、そこにおもいがけない友人がいて「やあ」と親しく声をかけてくる。いい物語には、いい時間がある。

きみが友人とそこで落ちあうことのできるような本。同時代を共にできる本。物語の中の友人たちと話しながら、一日のなかにゆっくりとしたいい時間をつくるのだ。いい物語を読んだあとは、何かがちがってくる。きみは自分のほんとうの感情をみつけることができるかもしれない。

（長田弘）

男友だち

ローザ・ガイ　加地永都子訳

晶文社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

Rosa Guy:
EDITH JACKSON
Original Copyright © 1978
by Rosa Guy
Japanese Copyright © 1981
by Shobun-sha Publisher, Tokyo.
Japanese Translation rights arranged with
The Viking Press, New York, through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

第一部　里親とその子どもたち　9
第二部　施設　139
第三部　選択　181

ブックデザイン　平野甲賀

男友だち

第一部　里親とその子どもたち

1

「あなたがたは額に汗してパンを食べなさい！　こう主はいわれた！　そして！　主はいわれたのだ！　六日のあいだ働いてすべてのわざをせよ！　そして七日目は！　安息日である！　主に感謝をしなさい！　しかし！　土曜の夜によっぱらってふざけ回り、ふつか酔いで次の日をむかえてもよいなどと主はいわれなかった！　そんなことを主はいわれたのではない……」

ジェンキンス牧師はどでかい声でしゃべっていた。牧師が張りあげる声はちっぽけなA・M・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

E・シオン教会をゆるがせた。前につき出た濃いまゆ毛はぴくぴくふるえ、とびだした目はあたしたちあわれな罪人のたましいをのぞき込もうとしている。そしてあたしは、まんなかの通路をはさんだ向う側に坐っている男に気をとられていた。

かれもあたしと同じ気分を味わっているらしい。身体をもぞもぞ動かしたりよそ見をしたり、今すぐ出て行きたそうだ。けどベイツ夫人がかれをつかまえているようすからすると、やっぱりあたしと同じように坐って話を聞いてなくちゃいけないらしい。ベイツさんはかれの腕をつかんで動けないようにしていた。かれは脚を通路に出して走り出しそうにしてるけど、ベイツさんがむりやり坐らせているんだ。目に笑いを浮べ顔をジェンキンス牧師の方へ向けたまま、ベイツさんは意地悪くニヤッとして、坐っていなさいと命じていた。

男はあたしが見ているのに気づいてあたしの顔を見返した。かれは肩をすくめ牧師を指さすと、あごの下に手をおきひげをなでるかっこうをした。そして笑い顔をみせた。

その通り、牧師のほっぺたから流れた汗があごを伝ってぽたぽた落ちているのに、一滴だけどうしても落ちないであごの先でたまっている。あたしはくすくす笑ってしまった。そしてピーターズ母さんにきこえたかしらんと思いそっちの方をみた。けどかなり離れて、太っちょで褐色の肌をした十二の男の子のボビーとのっぽのケネス――この子は白人だ――の間にはさまれた母さんは、あたしを見向きもしなかった。あたしはまたあのいきな男に目をやったけど、かれはもうあたしをみていなかった。

かれはベイツさんの方を向いて何とかその腕を逃れようとしていた。あたしはかれから目を離さず、もう一度こっちを向いてくれるのを待ってたけど、かれはふり向いてはくれなかった。かと思うとかれはベイツさんに何事かささやいた。ベイツさんは笑った。あたしは顔がかっとほてって目をそらした。男たちはいろんな場所であたしをいじめるんだ。あたしはケネスとあたしの間に並んだ妹たちを見下ろした。三人とも日曜の晴着をきている。男の子たちのことは誰もかまってやらなかった。

十三になるベッシーはジェンキンス牧師をみつめたままだ。赤い帽子にかくれた目は大きく、赤い格子縞の春のコートは立派にふくらんだ胸を隠している。でもベッシーは牧師の説教などひとことも聞いていないんだ。どこか別の場所に腰をすえているんだ。それがどこだか誰も知らない。ベッシーは小さいときから心のうちを誰にもあかさなかったし、十代に入ってもそれはちっとも変らなかった。男の子にとくに関心をもっているわけでもない。犬や猫までいれて自分を好きになってくれる生きものならなんでもベッシーは好きになった。いちどでもなめたりそっとつついたりすれば、ベッシーを自分のものにすることができた。

ミニーはたった十一で本と友だちに興味をもっていた。しかもピークスキルにきてほとんど白人ばかりの学校に通い出してからできた白人の友だちだ。ネイビーブルーのコートをきて白いストローハットをかぶったミニーは、褐色の顔にワセリンを塗ってまるい鼻をてかてか光らせていたけど、それが生き生きしたまるい目によく合っていた。ミニーが牧師のいうことを一言もらさ

ず聞いているのをあたしは知っていた。どうせあとであたしたちみんなが、同じ話を、ミニー流の話し方で、あたしの大きらいな習いたての「白人」風の声で聞かされるんだ。だからといって曲げようのない事実まで消えるわけではなかった。ミニーはあたしたちの中でいちばん頭が良いという事実だ。学校に上っていらい、ミニーは悪い点をとったことがなかった。猫が毛皮を脱ぐようにあたしたちが家や学校を次々と捨てて、「施設」で保護されるようになってからでさえ、ミニーの成績は落ちはしなかった。

スージーはミニーより十ヵ月姉さんだけど、成績はFまで下った。あたしもベッシーもそうだ。何年か前ミニーは学校でスージーに追いつき、その後はスージーをはるかに追い越した。それでもスージーの方はちっとも変らなかった。スージーの関心はすべてミニーに向いていたんだ。スージーはミニーのお尻にくっついて歩き、男の子なんか何とも思っていなかった。着るものさえミニーのまねをした。あたしが意地悪のつもりでスージーに向ってミニーとふたごみたいだよってからかったときも、スージーはぜんぜん気にしなかった。前よりもっと影が形に添うようにミニーにくっついて回っていた。

でもスージーはベッシーやミニーよりもあたしに似ていた。顔はとりえがないし肌は褐色、髪の毛ときたら整髪剤をつけてもかっこうがつかないくらい短くてくせが悪い。でもスージーは足が長く、あたしの年、つまり十七になるころには、五フィート三インチのあたしよりずっと背が高くなるだろうと、あたしは思っていた。

スージーがあたしに似ていたから、あたしは、スージー自身が賢い子になって、いろんなことをやってほしかったんだと思う。妹たちみんなの面倒をみなきゃならなかったために、あたしにできなかったいろんなことをだ。でもぜーんぜん駄目。スージーとミニーは、ミニーが生まれてからずっと、ひとつのベービーベッドに寝てた。それがこういう結果を生んだんだ。

そしてあたしといえば、男のことなど考える時間なんかなかった。学校へ行ったり、子どもたちの世話をするほか、ピーターズ母さんがパートの仕事に出ている間、家の仕事もしなくちゃならないので、すごく忙しかったからだ。自分の時間なんてぜんぜんない。まったくゼロ。男のことを考える時間など一秒もなかった。それだのにおろしたての紺のスプリング・スーツを着たあたしは、たえずスカートのしわを伸ばしたり、白いもめんのブラウスをいじくり回してきちんとみえるようにしながら、ぜったいに通路の向う側は見ないように気を引きしめていた。

でも心の中では、あたしはずっとかれをみていた。あのひとをミスター・ブラウンってよぶことにしよう。なぜってブレザーもずぼんも色はブラウンだし、タートルネックのシャツも淡褐色なので、かれの褐色の肌がいっそう際立ってみえるからだ。とにかくすごくいかしてるんだ。ベイツ夫人といっしょにいるのが、ぴったしきまっているみたい。

「そして主は憤りをもたらされるであろう！」ジェンキンス牧師はまだ大声でしゃべっていた。「そうなのだ！　主は憤りをもたらされるのだ！　罪を犯したその翌日、休息をする口実に！主の日を使うことができるなどと！　考えている偽りの信者どもの上に！」

「アーメン！　ブラザー！　アーメン！」会衆の中の女たちが牧師のことばに合わせてうなずき、叫んだ。熱狂している人たちもいたし、足を踏みならす連中もいた。ほかの人びとは何やらぶつぶつとうなり声を出した。「その通りだ、ブラザー！　その通り！」

通路の向うで動く気配がして、ミスター・ブラウンがあたしの注意を引きたがっているのがわかった。とうとうあたしはそっちをみた。かれは指で輪をつくり耳のそばでくるくる回してから、牧師の方を指さした。その次にはもうひとつ輪をつくり、今度はベイッさんを指した。それからげんこつをつくってどんどん手を上へ上げていき、今度は自分の頭の上におろした――神の怒りがかれのところに落ちることを示したわけだ。あたしは声を立てて笑ってしまった。ベイッさんはあたしの方をみて、笑いかけた。あたしは恥ずかしくなって顔をそむけた。今度はもうそっちの方を絶対みなかった。ベイッさんのあの目にみすかされるような気がしたんだ。

曲げようのない事実。あたしはベイッさんをものすごくかっこいいと思っていた。身長が六フィートもあり、厚い唇をゆっくりと左右に引いて笑うときれいな歯がきらきら輝いた。灰色が目立つ髪を首のうしろでまげにゆい、いつも柔らかなウールのツーピースを着ていた。その時々で色が違うこの洋服は、背が高く骨ばった体格によく似合っていた。そしてこのベイッさんはいつでもきまって、一連の真珠のネックレスをつけていた。はじめてみたときからあたしはこの人をばつぐんにエレガントだと思ってた。

眼をつぶっていても、このひとのタールを溶かしたような目を思い浮べることができる。その

底に太陽が沈んでいる目だ。あたしはその目をまっすぐにみたことがない。あたしがみているのに気がついてこっちを向くたび、あたしはそっぽを向いてしまう。頭がかっとして――おたおたしちゃうんだ。

「……さて私は、今日のこの安息日に礼拝に出席された兄弟姉妹に感謝したい。そしてこの次は御家族やお友だちや隣人とともにこられるようお願いしたい。みんないっしょに主の恵みがあるように祈ることができるために。祈りましょう……」

礼拝が終った。あたしは急いで通路に出ようとした。でもピーターズ母さんが合図をしてとめた。うしろの列の人たちが出ていくまで待ってなきゃいけないんだ。あたしは脚の長いブラウンが、会衆の背中をよじ上ってでも行きたいというようすで教会の出口に向かうのをながめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo